

保育士養成校における領域「人間関係」の授業形態についての研究

—子どもの人間関係の形成を効果的に援助・促進するために—

(中間報告)

川崎医療短期大学 神 垣 彬 子

The effects of the learning form of “human-relations”:
The examination of the method to assist and promote the formation
of the human relations of the child effectively

(progress report)

Kawasaki College of Allied Health Professions KAMIGAKI, Akiko

【キー・ワード】 領域「人間関係」、授業形態、保育の質の向上

【Key Words】 contents of “human-relations”, learning form, quality of a childcare

問題と目的

領域「人間関係」とは、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う（「平成20年3月28日厚生労働省告示 保育所保育指針」より抜粋）」ことを目的とした保育内容5領域の中の一つである。かつて、領域「人間関係」は「社会」という名称であり、現行の指針ほど対人関係に焦点化した内容ではなかった。しかし、核家族化の進行やきょうだい数の減少、過保護の問題、家庭外での子ども集団の崩壊、あそびの変化など、子どもを取り巻く環境は大幅に変化した。そのため、改めて「人間関係」という独立した領域が必要となり、対人関係に焦点化した目的やねらい、保育内容が設定された（cf. 芦田, 2003; 民秋・佐藤・清水・千葉・川喜多, 2008）。

領域「人間関係」が設定された後の保育所保育指針の改定においてもその傾向はますます強くなり、その時どきの社会情勢を踏まえた目的やねらい、保育内容の再設定が行われている。平成20年の改定では、自信、共同、規範意識、心のよりどころとしての「家族」の4点がキーワードになるなど（cf. 無藤・民秋, 2008）、より一層人とのかかわりを重視したものになった。

しかしながら、実際の子どもたちの人間関係の形成能力は、向上するよりもむしろ著しく低下し続けているといえる。なぜなら、現代の子どもたちは極端に人間関係の幅が狭く、社会性と情緒性が欠如しているからである（才村, 2007）。テレビやゲームの普及により、子どもたちの遊び空間は室外から室内へと変化し、遊び仲間の狭小化も相まって、子ども同士の心的交流の機会は希薄になってきている（才村, 2007）。このような背景があるからこそ、子どもがいざこざや葛藤を乗り越えてより良い人間関係を形成していくことは、今日の幼児教育において非常に重要な課題であるといえる。

一方、保育所保育指針の内容は、平成20年の改定によって大綱化された。それまでのものと異なり、年齢別の保育内容の表記はなく、重要な要素だけを取り出した大枠のレベルで基本を整理した形となった(無藤・民秋, 2008)。すなわち、解釈の自由度が高くなり、各保育所で創意工夫を凝らすことができるようになったといえる。その反面で、内容を具体的に想像し、理解することが難しくなった。なぜなら、子どもの人間関係の形成を援助し、促進する役割を担う保育者もまた、対人関係における相互作用の経験に乏しい世代や人間関係の形成能力を十分に獲得していない世代が多くなってきたためである。

近年の保育者養成校の学生が抱く保育者のイメージは、「子どもが好きで、健康で、明るくて、ちょっと子どもと遊ぶことができれば勤まる仕事」である(赤堀, 2007)しかし、保育者の実際の業務内容はそのような簡単なものではない。例えば、子どもの叱り方や褒め方、諭し方の一つであっても、そこには十分な知識と経験が必要である。本研究で扱う、子どものいざこざ場面や葛藤場面への介入に関して言えば、保育者の側に、望ましい人間関係を築くための能力が十分に備わっていなければ、子どもへの介入の際に適切な援助を行うことは難しい。すなわち、領域「人間関係」の目指すものは、子どもにとっての課題であると同時に保育士養成校に在籍する学生にとっての課題でもあるといえる。

そこで、本研究では、領域「人間関係」の授業において、保育者を目指す学生が子ども同士の人間関係の形成を効果的に援助し、促進するための知識を獲得することに加え、学生自身の人間関係の形成能力をも獲得できる授業のあり方を検討する。本研究において効果性を検討する授業形態は、グループ学習である。子どものいざこざ場面や葛藤場面に対する望ましい介入方法をグループで考える活動を通して、学生が実際に人間関係における相互作用を経験し、人間関係の形成能力を高めることができるのであれば、子ども同士の人間関係の形成を効果的に援助し、促進するための知識の獲得がより一層深まると予測される。

方 法

予備調査 実務経験のある複数の保育者に、実際の子ども同士のいざこざ場面や葛藤場面を3つ提示してもらい、それらの場面で各々がどのような介入を行ったのかをアンケート形式で質問する。そして、その結果をもとに、授業で使用するいざこざ場面および葛藤場面の事例とそれらに対する介入の模範例を作成する。

対象者 保育士養成校における領域「人間関係」の授業を履修する学生70名。学生は35名ずつの2クラス(Aクラス, Bクラス)に分けられ、14回の試験的授業のうち、前半7回はAクラスの学生に、後半7回はBクラスの学生にグループによる事例学習(以下、グループ学習)を実施する。各クラスとも、グループ学習を実施しない回は個別の事例学習(以下、個別学習)を実施する。

実験計画 授業において、子ども同士のいざこざ場面や葛藤場面の事例を文章で提示し、「もしあなたが保育者としてその場にいたとしたら、あなたはどのような介入を行うか、また、その根拠はどのようなものかを考えて書いて下さい」と教示し、自由記述による回答を求める。個別学習の場合は

ここで学習を終了するが、グループ学習の場合は5～7名の小グループを作って個別学習の内容をもとにディスカッションを行い、グループとしての見解をまとめる。その際には、後で学生同士の相互作用の様子を検討することができるよう、見解をまとめる過程におけるやりとりを記録に残すよう教示する。そして、グループ学習後に各グループの代表によるディスカッションを行い、クラス全体としての見解をまとめる。

個別学習の場合もグループ学習の場合も、最終的な見解がまとまった後に予備調査で作成した介入の模範例とその根拠を提示し、個別、あるいはグループで考えた介入方法およびその根拠との相違点を見つけるよう促す。さらに、各自の考えた介入方法およびその根拠の長所、短所およびその改善点についての記述を求める。

これらのデータを毎回收集し、学生の考えがどのように変化していくかを調べる。

引用文献

- 赤堀方哉 (2007). 保育者養成校における領域「人間関係」の指導法としてのロールプレイの可能性. 梅光学院大学論集, **40**, 27～37.
- 芦田 宏 (2003). 2節 領域「人間関係」から「人間関係」へ, 第2章 領域「人間関係」の考え方, 小田 豊・奥野正義 編著 保育内容 人間関係. pp. 24-30.
- 保育所保育指針 (2008). 平成20年3月28日 厚生労働省告示第141号.
- 二階堂邦子・千葉裕子・常田奈津子 (2000). 四年制保育者養成に関する研究(1): 学生がイメージする保育者. 日本女子体育大学紀要, **30**, 155～164.
- 才村 純 (2008). 家庭で、今何が起きているか; きびしさを増す子育て事情, 日本子ども資料年鑑 2007. KTC 中央出版, pp. 17-24.
- 塩見優子・秋川陽一・石橋 由美 (2000). 保育学生の学習・生活等の態度と意識に関する研究: 岡 山県内保育者養成10校の在学生対象アンケート調査をもとにして. 保育士養成研究, **18**, 1～17.
- 民秋 言・佐藤直之・清水益治・千葉武夫・川喜多昌代 (2008). 「教育要領」「保育指針」の変遷, 秋民 言 編 幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷. 萌文書林, pp. 4-17.
- 無藤 隆・民秋 言 (2008). Nocco セレクト vol.2 ここが変わった! NEW 幼稚園教育要領・保育所保育指針ガイドブック. pp. 22-30.

